

幕末明治の写真師列伝 第六十三回 内田九一 その二十八

平木政次著『明治初期洋画壇回顧』（日本エッチング研究所出版部刊、1936年）によると、「内田九一は長崎の人で、松本先生の盡力で忽ち名を博し、至尊の御寫眞も謹寫し奉り、貴顕紳士は必ず内田の寫眞でなければならぬ様になりました。撮影所は浅草の代地にあり、支店は横浜の馬車道にもあり、本邸は駿河台紅梅町にありました。明治八年頃病歿して、其の養子が病馬院の生徒で、坂野の養子も同院の生徒でありました。」とあり、亡くなった内田九一の養子として、病馬院の生徒だった人物がいたのである。

内田九一には実子はいなかったのだが、『故内田九一短歴』によると、親戚の馬田（ばだ）氏の長女・良子を養女としている。この親戚の馬田氏とは、調べてみると元々は吉雄家から小通詞の馬田家へ養子に入った人の家であった。九一と仲が良かった前述の馬田敬助が、吉雄圭齋の兄の次男であった。そのため九一の母と吉雄圭齋の妻が姉妹という関係もあり、『明治初期洋画壇回顧』では「親戚の馬田氏」と書かれていたのである。

長崎市内の春徳寺にある吉雄家の墓域には、この馬田敬助の墓があり、よく調べてみると馬田敬助には明治2年（1869）に亡くなったシゲという前妻がいた。おそらくこのシゲの娘が良子だと考えられる。この墓域には他にも墓石に、「法息院順栄光龍大姉 昭和十四年二月十二日卒 吉雄龍女 行年七十二歳」と刻まれた墓を見つけたが、没年から逆算するとこの吉雄龍女は、慶応3年（1867）生まれで、明治8年（1875）頃はまだ数えて8歳。この吉雄龍女が良子ではないだろうか。

東京から戻された良子は、再婚した父の馬田敬助も明治8年（1875）12月29日に亡くなっていることから、吉雄圭齋が引き取ったと考えられるのである。そのため良子は馬田姓ではなく吉雄姓なのであろう。また本名も「良子」ではなく、墓石に刻まれた「龍（りょう）」が正しいと思われる。さらに調べてみると吉雄圭齋は馬田敬助の息子、馬田敬も養子にしていた。馬田敬助は前妻に死なれた後に、息子の敬と龍（りょう）を吉雄圭齋に引取ってもらって、東京へ行き、自分自身も養子に行ったというのが、東京時代のその後はよく判らない。馬田敬助は明治8年（1875）12月29日に享年35歳で亡くなっている。法名は晦月亭蓮突神帆居士。（注1）

この馬田氏の長女・良子の入婿は、生澤總一という人である。生澤總一は、元は栃木県都賀郡沼和田村の生澤豊吉と玉の二男として、安政5年（1858）11月21日に生まれた。生澤總一は病馬院の生徒であったが、おそらく当時、この病馬院の責任者（明治8年（1875）陸軍本病院長兼馬病院長）であった松本順（松本良順）の計らいで、良子の入婿になったと思われる。生澤總一が内田家の養子として内田聰一となると、二代目・内田九一（写真館主）となったが、写真については当然のことながら素人同然なので、実際には、長谷川、古賀、飯岡、山際などの九一の弟子たちが写真撮影をしていた。良子が長崎に戻されてしまう理由は、これは今となってはもう史実としては証明できないのだが、明治13年（1880）4月23日付『いろは新聞』の「寫眞師内田九一の後家乱行の事」という記事に、「思ひ出しては寫眞を眺め、なぜか撮影（しゃしん）は物いゝはぬ、實やけふは何月何日、末世盛りに相果し亡夫九一が命日、暮行月日も七年餘り、弔ふ後家と内田の門人、回向正眞紙採を、高橋（由一）さんの油絵に、豫て頼みはせぬ者を、魂ひ込むる寫眞の手練、名誉の餘功もあるならば、

嬌婦（ごけ）よくたつたと一言の、お声が聞たい聞たいと、撮影の前で口説でも、十萬億土と娑婆の隔絶、開化の御世に貞節はないと、自由の権を振廻す、女天下の則天皇后、豊臣の淀君、近くは木戸口の開放し、食客の優書生を閨門へ引入れて、「翠」帳「紅」閨にお巫山戯なさる、院（浮雲い）淫乱後室の鬢に倣ふ、浅草代地の西洋家屋、コロジオンの匂ひを麝香で消す後室どの、本夫は先年うた形の泡と消た、其後に門人がお伽の交代、押勝籠衰へて道鏡盛んなり、夫さへ残らず喰飽きて、近頃出入の女義太夫竹本綱春の媒酌で、昨今空米相場営業停止不服に付、既に申告にも及ぶべき発議人、高橋お伝に關係の穴倉佐七郎が子分と聞へし、蛸殻町の米商島田慶助といふ強尻と、いつの間にやら「出来」合て、今はふたりが仲買も、「引」にひかれぬ「本場」の「昂低」、傍の「停止」も聞かばこそ、後家は島慶を追々「貝占」、子息の總一が家に居ては思ふ様には快樂まれずと、此頃勤めて大坂におし下し、その後は誰憚らず二階住居、彼慶的を昼夜引入れ、硝子を焼かぬ日はあれど、お顔見ぬ日はないまいなど、折節綱春が取巻で、川長あたりへ舁けるので、後家帳株張の門人達がボヤ付、春気の浮和浮和話しは五圓が有つたら又此頃、併し後家さんはツキが悪いから、罰が當らなければよいがネー看客（みなさん）。とあることから、未亡人となった「おうた」の素行の悪さもその一因のように思える。また、東京浅草大代地、馬車道通り、駿河台紅梅町などの資産を全て処分したことを考えると、米商島田慶助の影響か、米相場などに手を出して失敗したことなどの金銭問題も推測できるが、これも今後の研究課題の一つとしたい。

横山錦圃編『敬宇中村先生序 東京商人録』（大日本商人録社、1880年〔複製版は湖北社、1987年〕）の「写真師之部」にも、浅草区に「瓦町廿六番地 内田九一」とあるので、この頃までは「おうた」が東京に居たのは確実と思われる。また、同書の神田区には「表神保町四番地 飯岡仙之助」とあるので、内田九一の弟子の飯岡仙之助は、明治13年（1880）にすでに独立していることもこれで判る。

その後、「おうた」は内田九一の大坂時代からの弟子、山際長太郎を連れて大坂順慶町3丁目心齋橋東へ移り、写真館兼幻灯屋の店を開いた。この店は、写真台紙表側下部に「大坂順慶町 東京内田支店」と浮文字で表記され、写真台紙裏側に墨文字で「明治廿四年五月 山田先生五十年」とある名刺判写真などがあることから、少なくとも明治24年（1891）5月まではあったようだ。しかしそれもうまくいかなくなってしまったのか、ついには廃業したようである。余談ながら、この大坂順慶町3丁目には、写真台紙製造及び写真機材、材料などの販売をしていた写真機商、鴻野多平（注2）の店もあった。

注1：馬田智夫『私家版 馬田氏風説書』（馬田智夫、2005年）参照。

注2：鴻野多平

嘉永3年生まれ。伊予河野一族。後鴻野と改め世々阿波国宮の島村庄屋。明治初年大阪に出て写真台紙を創製。苦心経営の末、上野彦馬はじめ一流の写真師の懇需するところとなり、鴻野台紙として著名であった。明治11年、杉浦六右衛門の愛顧をうけ写真機材を販売した。明治三十八年八月逝去、二代目鴻野次郎が業を継いだ。

（森重和雄）